

# 世界で活躍する同窓生

音楽家 ヴァイオリニスト 57期 藤江 扶紀さん

## 自己紹介とヴァイオリンを弾くようになったいきさつ

はじめまして、こんにちは。附中57期の藤江扶紀です。  
職業は、音楽家、ヴァイオリンを弾いています。

私が最初にヴァイオリンに触れたのは、遡ること30年近く前のことになります。

4歳になる頃に、幼稚園の友達のお母様から「あるお宅にヴァイオリンの先生を呼んでレッスンするので見学に来ませんか」とお誘いのお電話。我が家は元々、両親が音楽好き、父は大の音響マニアで、母はグランドピアノを持って嫁いできたらしく、私が生まれたときから自宅に防音室がありました。母はピアノにあまり興味を示さなかった姉と私をそのヴァイオリン教室へ連れて行き、そこから私の音楽人生がなんとなく始まりました。

その後、7歳の時に、その後の音楽人生に欠かせない運命的な出会いをすることになります。神尾真由子さん（チャイコフスキー国際音楽コンクールの覇者）など後に世界で活躍するような方を教えている先生の公開レッスンを受ける機会に恵まれました。そのレッスンが衝撃的で母は目から鱗がポロポロ、膝をつき、子どもの目の高さに合わせて色々な音色を聴かせてくださるレッスンに、すっかり魅了されてしまった（そんな）のです。

私はというと、その時は緊張していたのか、帰り道に買ってもらった約束だったポケットピカチュウの印象が強くて、すみません。でも、純粋に、ヴァイオリンってこんなにいろんな音が出せるんだ〜！と子どもなりに驚いたのを覚えています。

その後、門下入りできることになり、以前にも増して練習に力が入るようになりました。それから5年後に、全日本学生音楽コンクールの小学校の部で全国一位を獲得するまで、毎回のレッスンが楽しみで仕方がなかったように記憶しています。レッスンで弾いてくださる先生の音は多彩で、まるで宝石箱のよう。20年経っても未だに鮮明に耳に残っています。そして、この時期には、私は音楽家として生きていくことを決めていたように思います。東京の大学に出るまで、みっちり鍛えていただきました。

クラシック音楽の演奏家は、作曲家が遺した楽譜に沿って音楽を作っていきますが、その過程で、大人になればなるほど“音色やリズム感の引き出しが多い”ということが助けになってきます。引き出しが多いことで、寛容性が生まれ、いろんな音楽を受け入れることができます。そうしてまた新しい引き出しを作ることができます。

小学生、中学生のような多感な時期に習っていた先生からの影響は計り知れません。毎回のレッスンは、先生の宝石箱からひとつずつ宝石を頂くような感覚だったかもしれないと今になって思います。

また、17歳の頃からついた先生のもとでは、演奏時の姿勢のことなどを勉強するようになり、自分のからだのことを知り、そのため基礎からまたやり直したりもしましたが、それも自分にとっては必要なことだったと思っています。



チェコ公演の様子が日本で放映されていたそうです  
(友人から送られてきました)



カルテットでのポートレート撮影